

遠くの故郷

千葉県四街道市 粉川 八重

遠くに行けば、変われると思っていた。何者にもなれない私だつて、何かになれる気がした。

目の前ではオレンジ色に染まった広い海が波打っている。聞こえるのは波の音と異国の言葉だけ。さびしくて、悲しくて、空しくくて泣きそうになる。このまま沖へ行ってしまう、海が私を飲み込んで全部を終わりに出きるんじゃないか、とうとうそんな考えまで浮かんでくる。もう疲れちゃったよ、私。ツン、と悲しさを波がやってきて、ずっと我慢していた涙がこぼれてしまった。涙はかわいた砂の上に小さな丸いシミをつくった。ああ、私の涙のシミは波のしぶきがつくったシミよりもずっとちっぽい。幾千幾万幾億もある波の雫にすら私はかなわない。悲しさがこみ上げてきてまた一滴涙がこぼれた。しかし一際大きな波がやってきて、涙のシミも波のしぶきのシミも、全部を一緒くたに消し去っていった。後に残ったのはびしょ濡れになった私の足だけ。靴下はまだ水が染み込んでいる。足の指を動かしてみると、海辺を歩いているときに入り込んだ砂と海水とが、靴下の中で混ざり合っていて痛い。虚無感に襲われた。

もう、帰ろう。

あつという間、本当にあつという間だった。あんなに嫌だった、でも願っていた日本は、たったの十一時間で着いた。成田空港。日本に帰ったはずなのに非日常的で、なぜだかふわふわする。二年前はこの非日常に心踊らされたけれど、今はもう疲れてしまった。外国人観光客や東京土産には目もくれずにキャリアバッグを引いて切符を買う。狭くて少し暗い改札口で、機械に切符を差し込んだ。高校時代はずっと電子カードだったし、切符を使うのなんて何年ぶりだろう。無くさないようにジーンズの前ポケットに押し込んだ。数分すると千葉行きの電車がやって来たので、キャリアバッグを持ち上げて車内に入る。バッグの中身はほとんどアメリカで捨ててきてしまったから、五キロもなかった。キャリアバッグも必要なかったかもしれない、そう思いながら優先席に腰掛けた。

電車に揺られていると高校時代を思い出す。小学校、中学校で優等生だった。優等生でいることが私のアイデンティティだった。小学生の時は百点以外はほとんど取ったことが無かったし、中学校では文芸部の部長だった。もちろんテストは毎回十位以内で、英語は一位だった。「かんのさん、ここ教えて」「菅野は優等生」何度も聞いた言葉だ。けれど県で一番偏差値の高い高校に入学して、「優等生菅野孝子」は消えてしまった。授業で言っていることが、さっぱりわからなかった。どんどん置いて行かれる。これ以上置いていられないように勉強時間を増やさなければいけなかったから、部活動にも入れなかった。そして深夜まで勉強し

て挑んだ、高校生初の数学のテストの点数は、四十三。信じられない。目を疑った。中学ではいつも九十点以上だったのに。その他の科目も散々で、どれも平均点より下だった。得意の英語が平均より三点高い、ただそれだけだった。教室の中で泣くのは恥ずかしいから涙を必死に我慢した。隣の席の文芸部に入ったという子は、スベルミスで英語の満点を逃したただとかで、机に突っ伏して泣いていた。

そんなことを思い出しているうちに酒々井駅に着いていた。まだ千葉駅は遠いしだんだん眠くなってきたので目を閉じる。しかし西日が強くて瞼越しでも眩しい。仕様がないので自分の腿の上に乗った。するとオレンジ色だった目の前は真っ暗になって、突っ伏すというのは色々なものを遮るのにちょうどいいなと思った。突っ伏してしまえば、私はあの時泣くことができたのかもしれない。

目を覚ますと千葉駅に着いていた。人の波に合わせて階段を登り、辺りを見回す。改装工事が終わったらしくデパートのように綺麗だった。美味しそうなお惣菜屋さんがずらりと並んでいる。私の知っている千葉駅では立ち食いそばしか売っていなかったのには。

とりあえず喉が渴いたので、駅の中のコンビニで麦茶を買って一口飲んだ。体の中を冷たいお茶が流れていくのを感じる。向こうのお店で売っているスムージーが少し気になるけれど、寝起き口の気持ち悪さをさっぱりするにはやはり麦茶が一番だ。もう

一口飲んでペットボトルのキャップを閉め、四番線のホームに向かった。

電車に乗ると急に現実感が湧いてきた。高校時代に通学で使っていた路線だからだろうか。私は今から帰るんだ。どうしよう。鼓動が速くなる。頭の中はアメリカから離れることについて、帰ってからのことなど何一つ考えていなかった。むしろ考えることから逃げていた。私はいつも逃げていたのだな。また自己嫌悪の波がやってくる。そこでまた気がつく。自己嫌悪して、考えることから逃げてみると。どうしよう。どうしよう。お母さんからメールも電話もずっと無視していた。今更どんな顔をして会えばいい？ 仮に実家に帰ってもどうやって働く？ 近所の人にどう思われる？ 小中の同級生になんて言われる？ 次から次へと不安が襲いかかってきて頭をかかえる。

「菅野？」

突然名前を呼ばれ思わず体が萎縮する。誰？ そつと顔を上げてみると、まだ三月だというのに半袖のシャツを着た男が私を見ていた。

「やつぱさうだろ、菅野だろ。俺のこと覚えてる？」

男はボサボサの眉毛をめいっばい上げてニカツと笑う。

「ごめんなさい…。誰ですか…？」

できる限り申し訳無さそうに微笑んでみる。

私はちゃんと笑えているだろうか。

「えー。忘れちゃった？ それとも人違いだったかな？」

鼻の穴をふくらませながら、聞いてもいないのにベラベラ話し出す。

「突然話しかけるとか俺ってマジで不審者じゃん。あれだよ、小中一緒だった橋俊輔。中三の時はクラス一緒だったし、小学校の時も合わせたら、えっと、四年間クラス一緒だったよ。」

数秒間空白の時間が流れた。黙っている間も男は私の目をじっと見ている。流石に人違いのふりをするのは難しそうなので、私は嫌々答えた。

「あー。もしかして、たちしゅん？」

「あー。もしかして、たちしゅん？」

「そう！そう！やっと思いついた？忘れんなよー！」

本当は忘れてなんかいなかった。顔を見た瞬間に思い出した。あのボサボサ眉毛を見ればすぐに分かる。でも未だに中学の同級生を覚えている、なんて思われたくなくて忘れたふりをしていた。

「懐かしいなー。」

私の悶々とした気持ちを吹き飛ばすかのようにたちしゅんはベラベラ話し出す。声が大きすぎて、車内の人にチラチラ見られるからやめて欲しい。恥ずかしい。

「菅野は千葉市の高校、あのめっちゃ頭いいところに行った後、海外行っただってな。うちの母親が話してた。菅野頭良かったもんな。中二の時に英検準二級だったろ？俺じゃ絶対ムリ。本当にスゲー。」

そんなことないって。やめて。本当にやめて。あなたが知っている菅野はもういないんだよ。こうなるのが分かってたから帰って

きたくなかったのに。

「俺海外行ったことないしさ、大学にも進学しなかったからわかんないんだけど、アメリカの大学って二年で終わるの？それとも一時帰国ってやつ？」

目の前が真っ黒になった。どうして一番聞かないで欲しいことを聞くのだろう。私は何も答えない。その時、ちょうど電車が止まった。五井駅だ。急いで電車から降りる。

「危なかったな。乗り過ぎすところだったわ。いやー、人と話していると時間が経つのも速いよな。キャリアバッグ持とうか？」

キャリアバッグに手を伸ばすたちしゅんを睨みつける。心の中の何かが、限界に達した。

「ほっといて。橘、あんたさあ、ずかずか人の中に踏み込んでくるのやめてくれないかな？少しは察してよ。」

ああ、私は何を言っているのだろう。さつき会ったばかりのたちしゅんに、私の気持ちを察せだなんて、無理に決まっているじゃないか。理不尽な八つ当たりだ。嫌な女。頭の中は気持ちが悪いくらいに冷静で、でも口は止まらなかった。

「さつきあんたは私のこと、すごい、すごい、って褒めたけどさ、そういうのが一番嫌なの。私は自分がすごいって勘違いしちゃったせいで、ほら、今こんな目にあってるんだよ。わかる？あんたって子供のころから何も変わってないよね。」

たちしゅんは呆気にとられた様子で私を眺めていた。そして一言だけ言った。

「あれだな、菅野は子供の頃とは全然違うな。」体の中に電流が

走ったみたいだった。はい、そうです。そうとしか答えられない。自分ではずっと前から分かっていただけけれど、他人に言われると再認識させられる。子供の頃とは全然違う、その言葉が私の頭の中をぐるぐると回っていた。

「橋、その眉毛ダサイから整えたほうがいいんじゃない？じゃあね。」

自分でもひどい捨て台詞だなと思いつながら、一人歩き出す。もう日は暮れていて、二年ぶりの市原は夜だった。

頭がいつぱいいつぱいで、何をどうしたのかも分からないけれど、気がついたらタクシーの走り去る音がして私は見慣れた家の前にいた。緑色の表札には菅野の二文字。ああ、今からお母さんに会うのか。さつきたちしゅんに当たり散らしたせいで、なんだかどうでも良くなった気さえしてきた。彼には感謝したほうがいいかもしれない。しかしそれでも緊張する。恐る恐るインターフォンに指を当てた。ピーンポーン。間延びした無機質な音が、もう逃げられないことを私に伝えた。

「はーい。どなたー？」

ガチャリとドアを開け、バジヤマ姿の母親が出て来た。バジヤマのまま他人の前に出て来るのか。少しびっくり。しかし呑気なことを考えている私とは反対に、彼女は状況を理解できないらしい。目を見開いて、口は半開きで、さつき私に罵られたたちしゅんと同じ顔をしている。

「たかちゃん…？」

はい、そうです。たかちゃん。菅野孝子。あなたのたった一人の

家族。

「ただいま。」

キャリアバッグを持ち上げて玄関のドアの前まで進む。呆気にとられているお母さんにニカツと笑いかけながら家に入った。木の匂いがする。懐かしいな。そのまま奥の部屋に入り爺ちゃんと婆ちゃんの仏壇の前に来た。屈んでりんを五回くらい鳴らし、遺影を眺める。まだ七十をすぎたばかりだったから少し若い。手は合わせずに心の中でごめんねと謝った。お土産を一つくらい買ってくれば良かったと思いつつ、仕様がなくて千葉駅のコンビニで買った飲みかけの麦茶をお供えした。

「そんなものお供えしてもしょうがないでしょ。」ふり向くと苦笑したお母さんが後ろに立っていた。

「お湯は捨てちゃったから、新しくお風呂沸かしてくるからね。」私は「わかった。」とだけ答えた。

お風呂に入るまで荷物の整理をして、お風呂から上がると用意されていた焼きそばを食べた。「せっかく帰ってきたのにてきとうなものでごめんね。」でも突然帰ってきた孝ちゃんが悪いんだよ。」お母さんは笑いながらそう言っていた。他には何も聞かなかった。怒られるのかな、泣かれるのかな、質問責めにあうのかな、そんな風に怖がっていた私が馬鹿みたいだった。お母さんは私が思うよりもずっと、「お母さん」だった。

時差ボケもなく、当たり前のように朝がやって来た。服は全部アメリカに捨ててきてしまったので、タンスの中に入っていた茶

色のズボンとConfidenceのプリントされた白いトレーナーを着た。なんでこんな服を買ったのだろう、なんて思いながら髪を結んでいると、突然ピーンボンとインターフォンの音が家中に鳴り響いた。お母さんはちょうどゴミ捨てに行っていて留守だったので、仕方なく私が玄関に向かう。ドアを開けると、目の前に紺色の半袖のシャツを着たたちしゅんが立っていた。眉毛が所々禿げている。

「よう、菅野。」

「何の用？私はこれから仕事を探さなきゃいけないんだけど。」
昨日感情をぶつけてしまったので、遠慮せずに返答ができる。何も怖くない。

「養老溪谷に行こう。」

たちしゅんが言った。あまりに突然で意味が分からない。しかしたちしゅんは続ける。

「うちの店今日定休日でき、俺暇なのよ。行こうよ養老溪谷。」
「俺の眉毛の責任取ってよ。」

なんとも悲しそうな顔で眉毛を指さしている。流石に可哀想にも感じてきた。

「眉毛の件は少し申し訳ない。謝る。けど何で養老溪谷なの？何で私なの？」

「いいじゃない養老溪谷。綺麗な所だよ。それに爺ちゃん婆ちゃんも天国行く前は毎週のように通ってたわよ。」

ゴミ捨てから帰ってきたお母さんが話に割り込んできた。お母さんには迷惑をかけたし断れない。

「分かったよ。準備してくる。」

一旦家の中に戻った。準備と言ったが何を持っていけば良いのだろう。そもそも養老溪谷ってこんな急にける所なの？とりあえずタンスの中からグレイのリュックサックを取り出す。高校時代通学に使っていたものだった。水筒は見つからなかったので、昨日仏壇に供えたまま放置していた飲みかけの麦茶をリュックサックに放り込んだ。他に鍵と携帯電話、財布、身分証明書を持ったが、他に何が必要なのだろう。足りないものはたちしゅんが持っていることを信じる。よし、と気を引き締めて玄関に向かった。そしてふと自分がワクワクしていることに気づく。昨日はあんなにも落ち込んでいたのに。少しニヤニヤしながら、大きさの割にスカスカのリュックサックを背負ってたちしゅんの待つ外に出た。

家から駅までは二十分程歩いたが、あつという間だった。たちしゅんが一人でベラベラ話し続けているのを聞いていたらいつの間にか駅についてしまい、少し不思議な気持ちになった。彼の話はほとんど子供の頃の思い出についてで、特段面白い訳ではないのだが、あんまり楽しそうに話しているものだから聞いている私もつい楽しくなってしまう。しかし、このまま養老溪谷まで話は続くのだろうか。駅の階段を上りながら考えた。私とたちしゅんが共有しているのは四年間の出来事だけで、しかも大して仲が良かった訳ではない。小学生の、それも低学年の頃は男女関係なく仲良く遊んでいたものの、だんだんと成長していくにつれ、照れ

くささなのか男子とは遊ばなくなってしまった。中学三年生の頃などたちしゅんとは話した記憶すらない。覚えているのは授業中に大声でふざけている彼を、軽蔑を含んだ目で眺めていたことくらいだ。冷静になって考えてみると今二人で出かけている事が信じられない。騙されているんじゃないか。そつとたちしゅんの横顔を盗み見た。彼はいつの間にか話すのをやめて左手につけている、黒いゴツゴツした時計を睨みつけていた。その姿を見て小湊鉄道は一時間に一回程しか列車が来ないことを思い出す。今は九時をすぎたばかりだから、あと十分もしない内に列車はやって来る。ちゃんと時間を調べてきてくれていたらしく申し訳ない。私は電車の時間のことなど何も考えていなかったし、準備も急いだとはいえ時間がかかってしまった。呑気な自分に恥ずかしくなるが、考え直してみると突然養老溪谷に行こうだなんて言い出す方がおかしい気もする。断られてもおかしくないのに、というか断られない方がおかしいのではないだろうか。真面目なだけか不真面目なだけよく分からない。そうこうしている内に、ページュの車体に赤いラインの可愛らしいディーゼルカーがやって来た。

車内の座席は茶色で、なんとも昭和な雰囲気漂っている。レトロで可愛いのですぐに降りるのはもったいないなと思ひ、携帯で養老溪谷駅までの乗車時間を調べてみると、一時間と表示された。少し驚く。この小さな車体で一時間も走るのか。なんだか頼りないような気もする。考えてみると養老溪谷には家族四人で車で行ったきりで、鉄道を使って行ったことはない。自分は市原の

ことを何も知らないんだなと実感した。

「菅野さ、覚えてる？」

突然たちしゅんが口を開き私の思考を中断させた。また思い出話を始めるのか。よくもまあそんなに話すことがあるものだと少し馬鹿にしてしまうが、ありがたくも思う。

「小学二年生の時、菅野が本探しててさ、俺のところの店に一人で来たことがあったじゃん。」

蓋をしていた記憶が蘇った。それと同時に恥ずかしさが襲い掛かる。私は羞恥心を笑いでごまかしながら答えた。

「まだそんな事覚えてたの？ほんと恥ずかしいわ。あれでしょ、私が橋書店に行ったはいいけどお目当ての本が見つからなくて泣き出して、結局婆ちゃん和爺ちゃんが迎えに来たやつでしょ。でも元はと言えばたちしゅんが悪いんだよ。俺の家は本屋なんだぜって自慢してきたでしょ。」

ニヤニヤしながらたちしゅんの顔をみる。すると意外にも彼は笑ってはいなかった。引きつった顔にすら見える。

「そう、それ。無い物はしようがないから、その日は何も買わずにお爺さんお婆さんと帰っていったじゃん。」

「うん。それがどうかした？」

「その日の一週間後位に菅野の欲しがった本を入荷したらしくてさ、俺の親父がお前のお爺さんお婆さんに連絡して、二人はすぐに買いに行くって答えたらしい。」

知らなかった。あの本はちゃんと買ってもらえていたんだ。十年以上前のことだから全然覚えていない。てっきり入荷されずに忘

れ去られたのだとばかり思っていた。事実私も忘れていた。今どこにあるんだろう。そもそもどんな本だったか。

「菅野のお爺さんとお婆さんが事故に遭って亡くなったのってさ、親父が電話したその日なんだよ。」

「これ、その時結局渡せなかった本だった。」

たちしゅんが赤い表紙の平べったい本を、腿の上ののせているリュックサックから取り出し、渡して来た。

「実は俺、お前とクラスが同じ時はめちゃくちゃ怖かった。いつか本のことを思い出して責められるじゃないかって。中学卒業してから離れ離れになって楽だったけどさ、それでも心の中に引っかかっているものがあって。」

「昨日、お前に会ったときさ、二人が楽になっていいよって言うてるような気がして。これ、すごく都合がいいと自分でも思うけど。本当にごめん。」

たちしゅんは私に無理矢理本を握らせた。そして俯いた。私は自分のリュックサックの中に本をしまふ。今日は快晴で、春の日差しが車内にも降り注いでいた。黄色い菜の花が風に揺れている。私も列車の振動に身を任せ揺れている。窓から入る風は少しだけ冷たくて、でも春の匂いがした。手を伸ばして立ち上がったら、私も風の一部に、いや、春の一部になってしまうのではないだろうか。そんな気持ちになれる。世界は綺麗だった。夢のように綺麗だった。

隣を見ると一人の男がリュックサックを抱え込んで突っ伏して

いた。

家から五井駅までは二人で横に並んで歩いていたが、養老溪谷からはたちしゅんが前で私が後ろを歩くようだ。踏切を渡り右折する。どこに向かっているのか分からないが、とりあえずたちしゅんの背中を追いかける。ここはどこなのか知りたい。しかし彼は私に本を渡してから一言も話さない。知らなかった。彼はあんなにも苦しんでいたのか。爺ちゃんと婆ちゃんが死んだのは自分のせいだ、そう思っていたのか。

何て真面目なんだろう。

私に本屋があることを伝えたたちしゅんに罪があるのなら、本屋に行つて本を欲しがった私をもっと大きな罪を背負っているじゃないか。そして電話で二人を呼びだしたたちしゅんのお父さん、トラックを運転していたおじさんにはもともとっと大きな罪がある。きりがない。爺ちゃんと婆ちゃんを殺したのは、一台のトラックだ。それで終わり。考えたところで二人は帰つてこない。ならば考えるのをやめてしまい、そうだな、横断歩道を渡る時には注意をせらう。これが私の出した終止符だ。正しいのかは分からないけれど。

赤い橋を渡つてからはだんだん上り坂になってきた。体力には自信がないので少しつらい。たちしゅんは少しペースを緩めてくれているようだけど相変わらず無言だ。恐らく私が傷ついているのだと思いを使つて、今頃頭の中でぐるぐる考え事をしているのだろう。後悔して、自己嫌悪して、自分を裁こうとして。なんだか

自分を見ているようだ。こういう時って話しかけられても返事をするこすらつらいんだよね。でも気を使われてそつとされていくのもつらいんだ。そうだよ？自分に確認する。私は口を開いた。

「高校に入ったらね、別世界だったんだよ。私よりも勉強ができる人ばかりですぐに落ちこぼれた。初めは追いつこうと頑張ったんだけどね、成績は上がらなくて、疲れたから頑張るのすらやめちゃった。それでね勉強しなくなって暇になったから念願の文芸部に入ることにした。中学では文芸部の部長だったし、本の世界なら私が私でいられると思ってたんだよ。でも駄目だった。みんな私よりも文章が上手だった。そして気づいたんだ。私の本への愛は所詮自尊心からくるものだったんだって。結局、あんなに好きだった本も私を追い追いついただけだった。」

たちしゅんはやはり無言で歩きつづける。私の話など聞いていないようにも見えた。でも彼は聞いている。耳を澄ませて聴くようにして聞いているのだ。私の話で頭をいっぱいにして、無限の後悔を一時忘れていく。そうあって欲しい。

「それでね、文芸部も本を読むのもやめちゃった。でも英語だけは続けたんだよ。嫌いになる理由が無かったから。そうして色んなことから逃げていたら、高三になったんだ。受験。私は海外の短大に進むことにした。遠くに行きたかったから。遠くに行けばこんなにも不甲斐ない私も変われると思ったから。」

上り坂がきつい。呼吸が荒くなる。しかし話さなくてはいけない。休んでいる暇などない。

「アメリカだとね、短大でいい成績をとると四年制大学に編入できてね、私はそれを目標に頑張っていた。寝る間も惜しんで勉強した。辛かったけれど充実していたと思う。自分は変わったんじゃないかって思えた。でもやっぱり駄目だった。」

坂は続き、たちしゅんの息の音も聞こえてきた。

「行きたい大学、いや行ける大学は全部不合格だった。ほら、アメリカの大学って学費がすごく高いからさ、奨学金がもらえる大学以外は通えないんだよね。いくら婆ちゃんと爺ちゃんの事故でお金が入ってきたとはいえ、私の家は母子家庭だし。結局諦めて日本に帰ってきたわけ。また逃げちゃった。馬鹿みたいだよ。」全部話し終えた。なぜだろう。たちしゅんに話していたはずなのに、途中から自分が聴き手になっているような、奇妙な感覚になっていた。そしてふと喉がカラカラなのに気づく。歩きながらリュックサックから昨日の麦茶を取りだし、傷んでいないことを祈りつつ飲んだ。美味しかった。昨日よりずっと美味しく感じた。深呼吸をする。緑が一層鮮やかに見えた。

「ついたよ」

突然たちしゅんが振り返った。ポールには大福山展望台入口と書いてある。

「滝じゃないの？」

ここまで案内してもらっておいでなんて言い草だろう。しかし驚きは隠せなかった。二人でベージュの展望台に向かい、螺旋階段をぐるぐると登る。一段一段、確認するかのように踏みしめて、頂上にたどりついた。

視界がいつきに広がった。目の前を遮るものは何もなかった。水色の空と緑の絨毯が、無限に広がっていた。そう、無限に。思わずたちしゅんの顔を見る。彼はこちらを見てニカッと笑った。

「俺ね、やっぱり菅野はすごいと思うんだよ。自分では満足できないのだろうけど、俺から見たら、その行動力が、その経験が、そしてその強さが、本当にすごいんだよ。」

心地の良い風が吹いた。

「でも何も手に入れられなかったよ。私がお婆ちゃんになったらさ、青春時代を後悔するのかな。ずっと物語ばかりを追いかけていて、現実を見ていなかったって。」

悲しくて悔しいはずなのに、爽やかな気持ちだった。そしてたちしゅんが言う。

「後悔しないくらいに沢山の身近な幸せを、今から探していけばいいんだよ。そうしたらきつと、現実だって物語になれるさ。」

なれるかな、私は雲一つない空を仰ぐ。うんきつとなる。

「あとさ、俺がさつき渡した本って洋書なんだよ。十年以上前から英語を追いかけてたんだな。」

私は思わずリュックサックから本をとり出して開いた。ページの白が春の太陽を反射して眩しい。でも目は塞がない。確かに英語の本だった。小学生じゃまだ読めないだろうに、こんな本を買おうとしていたのか。少し笑ってしまう。ペラペラとページをめくっていると、ある一文が目についた。

Be proud of your self

幼い頃の私を抱きしめたかった。するとたちしゅんが展望台の手

すりに寄りかかって言った。

「菅野仕事探して言って言ってたじゃん。うちで働かないか？英語がわかる人いると助かるんだよ。それにさ、また本を好きになれるかもしれないじゃん。」

出来るかな、少し不安になった。でも心の中で唱える。Be proud of your self 強くなった気がした。

「働きたい。ぜひ働かせてほしい。もし洋書が見つからなくて泣きだしちゃう子がいたらさ、私が一緒に探してあげるんだ。」

たちしゅんはいいね、と微笑み水筒の水を飲み始めた。今まで一口も水を飲んでいなかったらしく、喉を鳴らしながら一気に飲み干す。ふと顔をよく見ると、水が一滴頬に残っていてキラキラと反射している。たちしゅんが視線に気がつき、どうかした？とこちらに顔を向けた。するとその拍子に水滴は頬をつたっていく。そしてポタリと落ちた。

たちしゅんの頬から落ちた雫は、私の涙と丁度同じくらいの大ささだった。